

【 復活讃詞 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
 恵 深 主 爾 高

くだり、みつかのほうむりをうけて、
 降 三 日 葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
 我 等 苦 釋 給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
 我 生 命 復 活 主 光

えいはなんぢにきす。
 榮 爾 歸

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
 何 時 世 世

しととひとしくどうぎなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
満器我 國光

しよおしゃ、あしとしゆきょうせいニコライ
照者亞使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
爾羊群爲

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
全世界爲 生命賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者祈給

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と

なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、

願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔

を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な

る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と

なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を

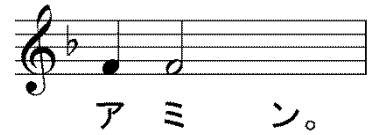
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
殺 聖 常 生 者 我 等 を

あわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第8調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

しゅなんぢらのかみにちかいをなしてつくの
主 爾 等 神 誓 作 償

えよ、

誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに大なり、

しゅなんぢらのかみにちかいをなしてつくの
主 爾 等 神 誓 作 償

えよ、

誦經) 主爾等の神に



【 使徒經 (アポストロス) 224 端 エフェス書 4 章 1 節～6 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルがエフェス人^{じん たつ}に達する書^{しょ}の讀^{よみ}、

司祭) ^{つつし} 謹みて聽^きくべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{われ} 我、^{しゅ} 主の爲^{ため}に ^{めしうど} 囚^{もの} たる者は、^{なんぢら} 爾等に求^{もと}む、^{なんぢら} 爾等が召^めされたる召^{めし}に稱^{かな}い

^{おこな} て行^{およそ}え、^{けんそん} 凡^{おんぢゅう}の謙遜と^{ごうにん} 温^{もつ}柔と^{あい} 恒忍とを以て、^よ 愛に因^{たがい}りて^{じょ} 互^{つと}に恕^{わへい}せよ、務めて和平

^{つなぎ} の繫^{もつ}を以て、^{しん} 神の一^{いつ}なるを守れ。^{まも} 體は一、^{たい} 神は一、^{しん} 爾等^{いつ}が召^{なんぢら}されたる召^めの望^{めし}の一^{のぞみ}

^{ごと} なるが如^{しゅ}し、^{しん} 主は一、^{しん} 信は一、^{せんらい} 洗禮は一、^{かみばんしゅう} 神萬衆の父^{ちち}は一なり、^{かれ} 彼は萬有^{ばんゆう}の上に^{うえ}

^あ 在り、^{ばんゆう} 萬有を貫^{つらぬ}き、^{われらばんにん} 我等萬人^{うち}の中に在^あり。

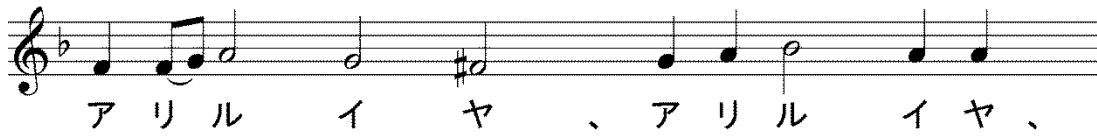
(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。主にある囚人であるわたしは、あなたがたに勧める。あなたがたが召されたその召しにふさわしく歩き、できる限り謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互に忍びあい、平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努めなさい。からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである。

司祭) ^{なんぢ} 爾に平^{へいあん}安、

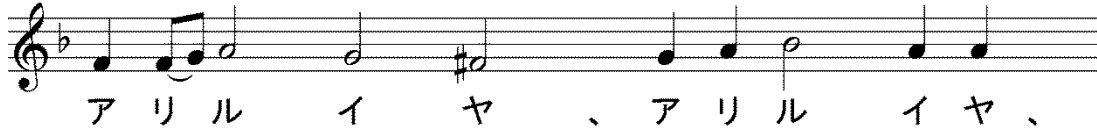
誦經) ^{なんぢ} 爾の神^{しん}にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第8調 】

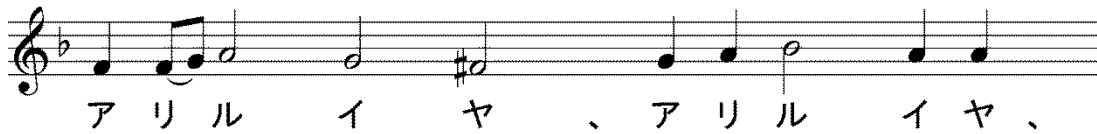
司祭) ^{えいち} 睿智、



誦經) 來^{きた}りて主^{しゅ}に歌^{うた}い、神^{かみ}我^わが救^{すくい}の防^{かた}固^めに呼^よばん、



誦經) 讚^{さん}揚^{やう}を以^{もつ}て其^{その}顔^かの^ん前^まに進^{すす}み、歌^{うた}を以^{もつ}て彼^{かれ}に呼^よばん、



司祭) (黙誦: 人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅ}宰^{さい}よ、我^わが心^{こころ}に神^{かみ}を知^しる智^ち慧^えの^い浄^きき^よ光^{ひかり}を輝^{かが}かし、我^わが思^し念^{ねん}

め^めひら^{ひら}き^きて、爾^{なんぢ}が福^{ふく}音^{いん}の^お教^{しえ}を悟^{さと}らしめ給^{たま}え、我^わが衷^{うち}に爾^{なんぢ}の福^{ふく}たる^{いましめ}誠^{まこと}を

おそ^{おそ}る^{おそれ}る^い畏^{われ}る^らを^{こと}も入^{ごと}れて、我^{われ}等^らが^{にく}悉^{たい}く^{よく}の肉^ふ體^おの^お慾^よを踏^{なんぢ}み、凡^{よろこ}そ^{ところ}爾^{ところ}の喜^{よろこ}ぶ^{ところ}所^{ところ}

を思^{おも}い且^かつ行^{おこな}いて、属^{ぞく}神^{しん}の生^{せい}活^{かつ}を過^すぐるを致^{いた}させ給^{たま}え、蓋^{けだし}ハリス^{かみ}トス神^{かみ}よ、

爾^{なんぢ}は我^わが^{たま}しい^{からだ}靈^{こう}と體^{しょう}との光^{われ}照^らなり、我^{なんぢ}等^{なんぢ}爾^{むげん}と爾^{ちち}の無^し原^{せい}の父^{しぜん}と至^{せい}聖^{しぜん}至^{せい}善^{しぜん}にし

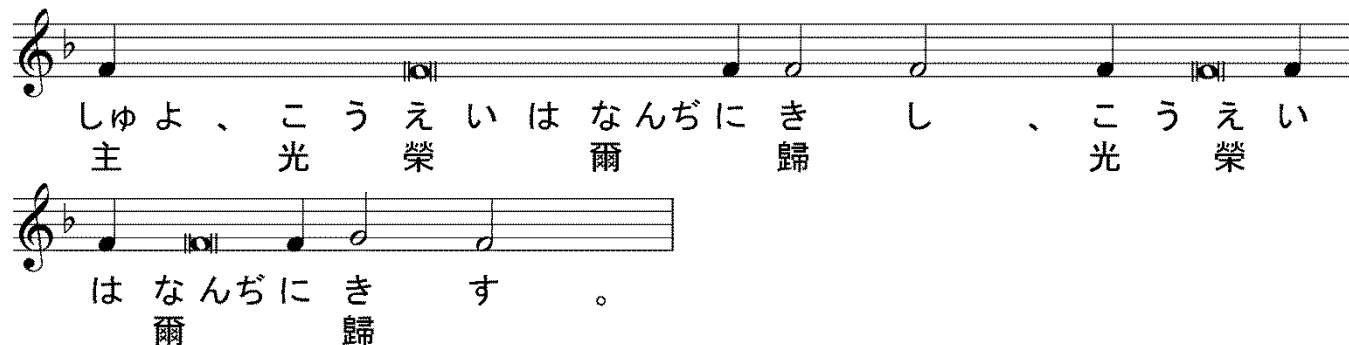
て生命^{いのち}を施^{ほどこ}す爾^{なんぢ}の神^{しん}とに光^{こう}榮^{えい}を獻^{けん}ず、今^{いま}も何^{いつ}時^{いつ}も世^よ世^よに、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書71端 13章10~17節 】

司祭) 睿^{えい}智^ち、肅^つみて立^たて聖^{せい}福^{ふく}音^{いん}經^{けい}を聴^きくべし、衆^{しゅう}人^{じん}に平^{へい}安^{あん}、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時安息日にイイスーの會堂に在りて教を宣べたり。爰に十八

年病の鬼を患う婦あり、偃みて、少しも伸ぶ能わざりき。イイス之を見て、呼びて之に

謂えり、婦よ、爾は其病より釋かれたり。乃手を彼に按せられたれば、彼直に伸びて、

神を讚榮せり。會堂の宰、イイスが安息日に醫を施ししを煨りて、民に謂えり、

わざを爲すべき日は六日あり、其中に來りて醫されよ、安息の日に於てせざれ。主彼に答え

て曰えり、偽善者よ、爾等各安息日に於て其牛或は驢を槽より解き、之を

牽きて飲わざるか、況やアヴラムの女なる此の婦十八年サタナに縛られたる者の

結を、安息の日に於て解くべからざりしか。彼が之を言う時、彼に敵する者は皆愧ぢ、衆

民は彼が凡の光明なる行事を喜べり。

(比較用 口語訳) ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」。彼は答えて言った、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」。彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおりに行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。イエスが答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を歩いて行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を歩いて行った。ところが、あるサマリア人が旅をしてこの人のとこ

ろを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリーブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行って同じようにしなさい」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ